

二つの意味？

葛谷 潤

(日本学術振興会特別研究員 PD)

本稿の狙いは、本書『真理・存在・意識』がフッサールの「意味」の概念をどのように解釈しているのかを明確にするための第一歩として、私が抱いた疑問点を提示することである。

『論理学研究』のフッサールの志向性理論において、意味と志向的对象という二つの概念は、作用の本質的特徴とされる志向性を記述し探求するために不可欠な理論的装置である。本書においてもこれらの概念は繰り返し言及される中で具体的な解釈を施されており、その大部分に関しては、本書に対する私の解釈が正しければ、基本的に同意できるものである。しかし、私の解釈が正しいものかどうかに関しては、ある不安材料がある。それは、第五章「認識の現象学」第四節における植村氏の意味概念の取り扱いをどのように理解すべきか、という点にある。

以下では、まず第一節において本書の上記の箇所を瞥見した上で、疑問点を比喻に頼って提示する。続いて、第二節において背景となる枠組みを提示し、第三節においてその枠組みのもとで疑問点を述べ直したい。

第一節 意味の二つの候補？

本書第五章第四節「志向性理論と命題のスペチエス説」において、氏はフッサールには二つの意味概念、すなわち「作用のスペチエスとしての意味」と「志向されているがままの対象としての意味」があったが、しかし『論理学研究』における形而上学的中立性の要請から、スペチエスとしての意味を選択したと論じている。

氏はまず、スペチエスとしての意味を取り上げ、それがフッサールにおいて作用

が対象に関係する仕方として特徴づけられていることを指摘する。

表現の意味とは、その表現の使用によってわれわれが対象に関係する「仕方 (Weise)」である。別の言い方をすれば、表現の意味とは、その使用において意味される対象が与えられる仕方なのである。(154-5. 強調原文)

もちろん、このような「対象に関係する「仕方」としての意味概念を導入することの眼目は、作用がある対象についてのものである（つまり志向性を持つ）ということがいかなる仕方で成り立っているのかということをも主題化するという点にある。我々の思考作用は本質的に何かについてのものである。我々は表現を使用する際、世界内の事物について考えたり、数について考えたりする。ここでさらに「では、作用がある対象についてのものであるということはいかなる仕方で成立しているのか」と問うとしよう。この問いに答えるとは、要は「作用がこれこれの志向性を持つのは、…ということのおかげである / …という仕方でである」という形式を持つ正しい説明を与えることである。そしてそのような説明を与えようとする試みにおいては、説明項に当たる「…ということ」ないし「…という仕方」に相当するものを名指す術語が要求されることになるだろう。フッサールは表現理解の体験を分析することを通じて、「意味」をそのような術語として選択したのであった。

フッサールはとりわけこのような意味を「意味志向の充実化」という枠組みにおいて分析していった。この点は氏自身が詳細に論じていることでもあるし、意味志向の充実化をある種の手続きとして解釈する富山の論考を引きながら、氏は先ほどの箇所を次のように続けてもいる。

このような観点を優先するならば、フッサールにとっての言語表現の意味は、言語表現とその指示対象を媒介する第三項としてのイデア的存在者というよりも、前者から後者に至る過程や手続きのあり方そのものとして理解されるものに近い。(155)

ある表現に関して、それがあある特定の対象に結びついているのはどのようにしてか、という問いに対して、それはその表現を使用する主体がその表現に結び付けている一定の手続きがある対象を選び出すからだ、という考えには（一般に成り立つかはともかく）訴えるところが明らかにある。ここまでは良い。

しかし、氏の解釈によれば、フッサールの意味概念はこれだけではない、という。

むしろ氏によれば「フッサールのもっとも独創的な点は、そこからもう一步先に進んだところにある。それは、表現の意味を表現作用の志向的对象と見なすという発想である」(155)。もちろん、この考えはそのままでは、フッサールが意味と対象を決然と区別しているという周知の事実と衝突するように見える¹。その点を踏まえて氏は、フッサールによる「志向されているがままの対象」と「志向されている当の対象それ自体」との区別に注意を促す。

現実の対象の構成要素を、ある作用によって〈志向されているもの〉と〈志向の外にあるもの〉とに区分することで、フッサールは、当該の作用によって志向されているものに着目する観点から捉えられた対象そのものを、〈志向されているがままの対象〉と特徴づけるのである (cf. XIX/1, 414-5 […])。問題の作用が表現作用である場合、それに含まれる意味志向によって〈志向されているがままの対象〉は、対応する言語表現の意味であることになる。(155)

具体例で考えてみると、ここではおそらく次のようなことが言われている。ナポレオンはその構成要素としてイエナで勝利したという側面を持っている。ここで、「イエナの勝者」という表現（を含む文）を理解する作用によって志向された対象として考えた場合、そのような側面に着目する観点から捉えられたナポレオンそのものが、問題の〈志向されているがままの対象〉ということになる。そして、この志向されているがままの対象、いわばアスペクト込みの対象が、「イエナの勝者」の第二の意味である、と。

なぜ氏は〈志向されているがままの対象〉が「意味」の名に値すると考えているのだろうか。続く箇所を読む限り、どうやらその理由は、「〈志向されているがままの対象〉の相違に訴えることによって、両者の認識価値（それらの文を用いたときの対象への関係の仕方）の相違を保持できる」(156)と氏が考えているからであるようだ。例えば「イエナの勝者は英雄である」と「ワーテルローの敗者は英雄である」という二つの文を考えた場合、この二つの文は〈志向されている当の対象それ自体〉のレベルではどちらもナポレオンと英雄性からなる事態にかかわっており、それゆえこの二つの文の持つ認識価値（それらの文を用いたときの対象への関係の仕方）を説明できない。しかし、両者は〈志向されているがままの対象〉のレベルまで考慮するなら、その違いを表現することができる、というわけだ。

作用のスペチエスとしての意味と志向的对象としての意味がどちらも「対象への

1. 「対象は、意味とは決して一致しない」(XIX/1, 52)。

関係の仕方」であるのだとすると、この二つの見解の間にはどのような差があるのだろうか。氏によれば、後者の意味概念を採用した場合、

われわれがある表現を用いる際にその表現の対象だけでなく意味にも何らかの仕方でかかわっていることを、意味を対象から数的に区別されたものとして物化せずに説明できる。すると、対象概念の拡大に伴って「存在しない対象」を認めさえすれば、意味を体験の成分と同一視するという誤謬を避けつつも、スペチエスを持ち出さずに意味の存在論的身分を明らかにできるだろう。(156-7)

基本的には意味が対象の側にあるのか作用の側にあるのかという点に違いがあり、志向の対象を意味と取ればスペチエスを持ち出さなくて良いので、志向の対象としての意味に分がある、というのが氏の見解のように思われる。

もちろん、実際にフッサールが公式に採用した意味概念はスペチエスとしての意味である。氏はこの理由を、考察を作用の実的内容に限るという『論理学研究』の方針に求める。

とはいえ、意味に関するスペチエス説を要請するのは、意味志向の現象学的な分析というよりも、作用の対象への関係を志向的对象を持ち出さずに作用が持つ作用質料によって説明するという、現象学に関する『論研』第一版の一般的な方針である。命題のスペチエス説は、こうした方針に従いつつ、意味の客観性についての説明を現象学の中にどのように埋め込むのか、という問題設定によって必要とされるのである。(159)

さて、以上から明らかに思われるのは、氏はこの文脈で「対象への関係の仕方」として言及されるべき「意味」とは何かという問いに対する答えの候補として、意味志向のスペチエスと志向されているがままの対象という二つを考えているということ、そして少なくとも、志向的对象を意味だと見なしておけばスペチエスとしての意味に訴える必要がなくなるような文脈がある、と考えているということである。

さて、以上の箇所を読んだ後に私にもはや明らかではなくなってしまったのは、氏がフッサールの「意味」という術語を含む理論として、どのような目標を持つ理論を念頭に置いて議論しているのか、ということである。少なくとも、「対象への関係の仕方」として意味を導入することの眼目を、作用がいかなる仕方である対象についてのものになっているのかという点を主題化することに見ていると解釈するこ

とは、この箇所を経ることで格段に難しくなっている。この点は、比喩に頼れば次のように確認できる。

仮に、「対象への関係の仕方」として意味を導入する眼目が、作用がいかなる仕方である対象についてのものになっているのかという点を主題化することにあるのだとしよう。すると、作用のスペチエスを持ち出すことなく志向的对象だけを持ち出してそれを説明できるという主張は、控えめに言っても困惑を引き起こすものに響く。第二節を踏まえた上で第三節でもう一度述べ直すが、それは例えて言うなら、東京駅で待ち合わせた友人に「あなたはいかなる仕方で東京駅にたどり着いたのですか」と尋ねた場合に、「東京駅」とか「東京駅はこれこれのあり方をしている」という答えが返ってきた場合と同じような困惑を引き起こす。もちろん、彼女が東京駅の持つ一定の特徴を利用してたどり着いたのであれば、東京駅が一定の特徴を持つということを述べることには明らかにポイントがある。しかしその場合でさえ、それは彼女がその特徴を利用するという手順で行動していた、という彼女の行動に関する事実が前提条件になるだろう。東京駅が一定の外見を持つことや、そこに（例えば）京浜東北線が乗り入れていることは、それだけで彼女が東京駅にたどり着く仕方を説明しはしない。明らかに、彼女自身の振る舞いやそれを支える能力への言及が不可避だろう。このことは、東京駅のあり方をいくら記述してもなしで済むものとは考えにくい。同様に、作用がある対象についてのものになる仕方を考察する際に、作用のスペチエスを考慮しないで済む、ということは考えにくい。（作用のスペチエスを考慮するだけでは足りない、という主張なら理解可能だが。）

すると、植村氏は「対象への関係の仕方」として導入される意味概念の眼目を別様に理解していると解釈する可能性が示唆される。つまり、「対象への関係の仕方」とされる上の二つの「意味」が天秤にかけられるような、そう言った観点があるのかもしれない。そのように理解して良いのか。もしそうでないなら、何らかの修正をする用意があるのか。もしそうだとすれば、そのような観点から意味を問題にする理論とはどのようなものか。これが私の疑問点である。

強調しておきたいのは、私の疑問点は実際にはフッサール解釈に直接は関わるものではない、ということである。私の疑問点は、煎じ詰めれば、上の二つの意味概念が天秤にかかるような理論的観点がいかなるものなのか、ということである。これはフッサール解釈の手前の問題である。つまり、「本当にフッサールをそう解釈できるのか」とか「本当にフッサールをそう解釈すべきなのか」という疑問ではなく、「フッサールをどう解釈しているのか」、より具体的に言えば、「氏がフッサールを解釈する際にフッサールが従事しているとされる探求は、（フッサールが実際に従事

しているかどうかは置いておいて) いったいどのような目標を持つ探求なのか」ということである。この点がはっきりしない限り、私にはフッサールが志向的对象の方を意味とすることもできたといった主張（これもフッサールが実際に何を言っていたかとは独立の主張だが）を評価することができない。

以下では、まず第二節で、上の疑問をより明確な形で述べるための一定の理論的背景を導入したい。その後、第三節で疑問を改めて述べ直すことにする。

第二節 二つの意味論

ここでは、スタルネイカーがクリプキに由来するとするところの二つの意味論、すなわち「記述の意味論」と「基礎的意味論」とを導入する。これら二つの理論は、対立するものではなく相補的なものである。この区別を理解するには、どうしても「意味論的値」という理論的概念を導入する必要がある。本稿では意味論的値という概念を導入した後、記述の意味論と基礎的意味論の区別を導入する。ある程度直観と比喻に頼る形になるが、本提題の論点を明確にするには十分だと思われる。

ある言語の記述の意味論とは、その言語の各表現の意味論的値が、どのように合成されてより複合的な表現の意味論的値を決定するのかを記述する理論である。では、意味論的値とは何か。この概念を直観的に導入する方法の一つは、主張という言語行為、より詳しく言えばその主な役割である情報伝達に注目することだ。主張は言語行為の中で最も中心的なものの一つである。そして、その最も核となる役割として誰もが同意するものの一つは、世界がどのようにあるかという情報を伝える、というものだろう。直観的に言って、情報を得るということは、世界がどのようにあるかに関する一定の可能性を排除し、一定の可能性へと絞り込む、ということとして捉えられる²。例えば私がコートを着ていくかどうかを決めるため、屋外が寒いかどうかを気にかけていたとする。つまり、世界は「屋外が寒い」という在り方をしているのかそうではないかという二通りの可能性があるのだが、どちらが世界の実際の在り方なのか、ということに関して決めかねているとする。ここで、外から私の友人が帰ってくる。その友人は外にいた際に直接外気に触れることを通じて、外が暖かいという情報を得ていたとしよう。言い換えれば、彼は外が寒いという可能性を排除し、暖かいという可能性に世界の在り方をすでに（適切に）絞り込んで

2. このような情報内容を特徴付ける一つの方法に、可能世界の枠組みは位置付けられうる。Stalnaker 1997, §2 や Stalnaker 2014, §1.1 参照。

いる。ここで、友人は私が外にコートを着て行こうか迷っていることに気がつき、私に「It's warm outside」と述べる。私はこの発話から、コートを着ていくことをやめる。ここで、友人の「It's warm outside」という文の発話が、まさに外が暖かいという情報を伝達する役割を持っている（この場合にはさらにその役割を実際に果たしている）ということは明らかに思われる。友人の主張が適切にその役割を果たしたことで、私は屋外が寒いという可能性を適切に排除することができた。つまり、そのような情報を得たのであって、それゆえそれに基づいて適切にコートを着ないで外に向かうことができた。

ある主張が一定の情報を伝達する役割を持つとした場合、その主張が伝達すべき情報の具体的な内容（いわば、その主張において話し手が聞き手にどのような可能性を「排除」し、それによってどのような可能性へと「絞り込む」ことを提案しているか）は様々な要因に依存して決まる³。そのような要因の一つは、一般に「発話の文脈」と呼ばれるものだ。例えば「It's warm here」という文の発話が伝達すべき情報内容は、駒澤大学の講師控え室でなされる場合と、ホワイトハウスでなされる場合では異なるものになる。例えば前者の場合、その発話はホワイトハウスの中が寒い可能性を排除せよとは提案していないが、それは後者がまさに提案していることだろう。他にも、「I am happy」という文の発話が伝達すべき情報内容は、ドナルド・トランプが発話するか私が発話するかでは異なるものになる。その文をトランプが発話することは葛谷潤が幸せでない可能性を排除することを提案してはいない。しかしそれはまさに私の発話が提案することだ。このような、文が誰に、いつ、どこで、誰に向かって発話されたのか等々の要因が発話の文脈である。さて、発話の文脈の他に主要な要因の一つとしては、発話された文が何かを挙げることができる。先ほどの例で、もし友人が「It's warm outside」ではなく「I am happy」という文を発話していたなら、（発話の文脈は同じだが）その発話が伝達すべき情報内容は外が暖かいということではなく、その友人が幸せだということになるだろう。明らかに、主張においてどの文を発話するかということは、その主張の内容の決定において大きな役割を持つ。ある文を用いた主張が伝達すべき情報内容の決定に際して、その文が果たした役割のことを、その文の意味論的役割と呼ぶことにしよう。文の意味論的役割は、一般にはそれだけでその文の発話の情報内容を決定するものではなく、たとえ発話の文脈を補ってさえ決定するとは限らないが、しかし少なくともその決定の基礎として働くようなものであると考えられる⁴。

3. 提案 (proposal) としての主張の特徴付けは Stalnaker 2014 の第二章参照。

4. 情報内容と意味論的役割の間の関係としては、藤川の「真理条件的内容」と「意味論

文は発話の単位となるアイテムだが、我々の日常言語において何が文であるかは、文の部分となる表現に何があり、それをどのように組み合わせれば文となるかを記述することで理論の形で記述できる。例えば「Alice is happy」が文であることは、(n 個の) 名辞と (n 座の一階) 述語をある順で並べると文になり、「Alice」が名辞であり、「[be] happy」が (一座の一階) 述語である、という条件を記述しておけばそこから判定できる。このような仕方である言語の文に何が含まれるかを確定する理論は、その言語の「構文論 (syntax)」と呼ばれる。

ある言語の各文の意味論的内容は、その文の部分表現が何か (及びそれらからどのように構成されているか) という事に依存すると考えられる。「Alice is happy」という文の発話と「Alice is sad」という文の発話の役割は、どちらもアリスが一定のあり方をしているという情報を運ぶことだが、その理由は、どちらにも主語の位置に「Alice」という語が用いられているからである。言い換えれば、「Alice」はそれを含む文の発話が運ぶべき情報を、アリスに関わるものにするような役割を持つ。同様に、「Alice is happy」という文の発話と「Brian is happy」という文の発話は、どちらも誰かが幸せだという情報を運ぶものになるが、その理由は、どちらにも述語の位置に「[be] happy」という語が用いられているからである。言い換えれば、「[be] happy」はそれを含む文の発話が運ぶべき情報を、幸せであるという状態に関わるものにするような役割を持つ。そして、「Alice is happy」という文の発話が運ぶべき情報は、それらの役割の合成、すなわちアリスが幸せであるという情報であるということになる。このように、我々の日常言語の各文の意味論的役割を決定する際に、各言語表現が担うような役割を「意味論的値 (semantic value)」と呼ぶことにする。ある言語の各表現の意味論的値がその部分表現の意味論的値からいかに決定されるかを特定する理論が、その言語の記述的意味論である⁵。

さて、記述的意味論は文の役割がどのようにして決定されるのかをある形で説明しているが、しかしそれが全く答ええないものがある。それは、その言語の原始表現がいかにして (how) その意味論的値を持ったのか、その仕方に関する説明である。

比喩に訴えることが見通しを良くしてくれるかもしれない。役割は役割でも、車の役割を考えよう。車に関して言語の記述的意味論に対応するのは、車全体の挙動に対して、車を操作するための各部分の挙動がどのように寄与するのかを記述する理論である (もちろん、構文論に対応するのは部品の種類とその組み合わせの仕方

的内容」の間の関係を念頭に置いている。前者に後者が一致しない可能性とそのことに関する様々な説明の選択肢に関しては、藤川 2014 の第四章参照。

5. 我々の言語においては使用の単位である文も他の文の部分表現になりうるので、文もまた意味論的値を持つ。

を記述する理論である)。例えばアクセルペダルを踏んで走行している時に、ハンドルを右に回したという状況を想像してほしい。もし車の各部品がその役割を適切に果たせる状況にあるなら、それによって何がもたらされるだろうか。もちろん、その車の右前方への旋回である。このことは、もし車の正しい「記述的意味論」が与えられたならば、確かに導き出せるものである。結果すべき挙動は、操舵機構と加速機構のインターフェースとしてのハンドルとアクセルペダルの役割、そしてそれらがどう組み合わせられているかから決定される。そのような役割とその合成の仕方を語るのが車の「記述的意味論」であり、それゆえあなたは車の「記述的意味論」を知っていれば、もたらされるべき挙動を知ることができる。(もちろん実際には車の各部品は故障など何らかの理由からその役割を果たさないかもしれないし、その結果として車は実際には動くべきように動かないかもしれない。しかしその場合でも、その操作が伴うべき帰結は適切に導かれる。)

しかし、もし車の正しい「記述的意味論」が与えられただけでは、あなたが導き出せないものがある。それは、問題の車の各部品がその「記述的意味論」が記述するような役割を持っているということはいかなる仕方か、ということである。車のある(単純な)部品の役割が、その都度の操作に対して一定の方向にタイヤの向きを変えることだとしよう。いったいどのような仕方か、その部品の役割が他でもないそれになっているのだろうか。その部品の役割がまさにそれであることを成立させていることはなんなのだろうか。これらのことに関して、車の「記述的意味論」は完全に沈黙する。それはただ、その部品の役割を述べるだけである。

言語に対する記述的意味論に関しても同じことが言える。例えば、私が英語の文「It is raining in Tokyo」をあなたの目の前であなたに向かって発話したと想像してほしい。この発話の役割はなんだろうか。つまりもし言語が適切に機能するなら、何がもたらされるべきだろうか。英語の意味論が与えられていれば、ここでもたらされるべきなのは、その発話の時点で東京で雨が降っているという情報があなたに伝達されることだ、とわかる。この文の各部分表現が想定された役割を果たすなら、私の言語行為がもたらすべきことは、各表現の役割、そしてそれらがどう組み合わせられているのかということから決定される。

しかし、完全な英語の記述的意味論でさえ、それが沈黙している事柄がある。それは、各単純表現がいかなる仕方かその意味論的値を持っているのか、ということである。例えばその記述的意味論は、「Tokyo」という語の意味論的値がある都市であるということを見せてくれる。しかし、いかなる仕方か「Tokyo」はその場所を意味論的値として持っているのだろうか。このことは一体いかなる事実存するの

か。より一般に、ある名辞が何かを意味論的値として持つ際、そのことはいかなる事実によって構成されているのか。そのような事実にはヴァリエティがあるのだろうか。あるとしたらいかなるヴァリエティがあるのか。こういったことには、意味論は沈黙する。それはただ、「Tokyo」の意味論的値がなんであるかを教えてくれるだけである。言い換えれば、当の語を用いた言語行為がある特定の都市についてのものになるというこの志向性がいかに成立しているのか、その「仕方」について、ある重要な事実を触れないままにしているということである。

では、基礎的意味論は具体的にはどのような探求を行うのか。それは様々な事柄に言及するだろうが、話者の心的能力、とりわけ認識能力に関する言及が欠かせないことは明らかに見える。英語の「red」という語がなぜ他でもない赤色をその意味論的値として持つのかの説明に、英語話者の共同体の成員の色に関する識別能力が出現しないことは考えにくい。(ピンと来なければ、成員全員が赤緑色盲であるような共同体にあなたが最初の異邦人として接した場合を考えて欲しい。その時点で、その共同体の色彩語に緑ではなく赤を意味論的値として持つ語が含まれているとは考えにくだろう。) 英語話者のほとんどが他でもない赤色のものに「red」を適用するという事実がその意味論的値を赤色にしているのであって、そのような適用は赤いものをそれ以外のものから視覚的に識別する能力を英語話者が持つがゆえに成立している。

述語ではなく名前だとどうなるだろうか。次のような状況を想像してほしい。ある女性(我々は「クリス」と呼ぶ)が通勤中、ある男性を決まってバス乗り場で見かけることに気がつく。クリスは彼に会ったことを単に記憶しているだけでなく、次に会った時に直ちに「いつもの彼ね」と正しく再認できる。彼女は毎日日記をつけており、その男性に関することを書き留めるために、彼を「Daniel」と(勝手に)名付けたとする。さて、実はその男性はクリスと同じ会社の社員であり、その本名は「Edward」(我々は「エド」と呼ぶ)である。ある日の社内広報で、先月の営業成績優秀者のリストが掲載され、そこにエドの本名である「Edward」が並び、それをクリスが読む。そして、その日の彼女の日記に次のAとBの二つの文が現れたとしよう。

(A) I saw Daniel in this morning.

(B) I've never seen Edward.

ここで出現する「Daniel」と「Edward」の意味論的値はどちらもエドであると考え

られる。そして、A は真である一方で、B は偽である（彼女は今朝はもちろん、これまで何度もエドを見かけているのだから）。

これらの表現は同じ意味論的値を持っているが、しかしそれらを異なる仕方を持っている。エヴァンズやピーコックが提示するような一つの説明によれば、日記に彼女が書く（文字列がそのトークンである）「Daniel」がエドを指すのは、(1) クリスがエドを再認する能力を持っており（つまりエドに会うたびに、一定の条件が満たされたならばそれが以前見かけた人物だと正しく同定でき）、(2) それに基づいてエドをその語で名指す（例えばエドを指しながら発話される「He is Daniel」を真とみなす）用意があるということのおかげである⁶。つまり「Daniel」は、クリスがエドを再認する能力を介するという仕方エドと結びつく。もしこのようなことが成り立っていなかったなら、彼女が「Daniel」という語を含んだ文を日記に書いたとしても、（その語がエドに結びつく他の仕方を構成するストーリーが補われない限り）それがエドを指すことはない。

しかし他方、明らかに、「Edward」がエドを特定する役割を果たすためには、このようなことが成り立っている必要はない。たとえ彼女がエドに会ったことがなく、それゆえエドを再認不可能だったとしても、彼女は依然として「Edward」という語を使用してエドを指示することができる。クリプキの説明モデルをエヴァンズが発展させ、その後心的ファイルの枠組みでさらに整理されたところの説明に従えば、「Edward」がエドを指示するのは、(1) 共同体内に「Edward」に関する「同じ名前の使用」と言えるような一定の名前ネットワークが成立しており、(2) そのネットワークの端緒にある生産者の集団がエドを「Edward」と名指しており、(3) クリスがそのネットワークの一部として（それに依存して情報を集めることができるという能力を働かせて）「Edward」の語を使用している、といった事実のおかげである、と素描できる⁷。つまり「Edward」は、「Edward」ネットワークを介してエドと結びつくという仕方エドを特定する。

このような「仕方」を主に話者の心的能力（場合によっては共同体内の心的能力のネットワーク）を明らかにすることで説明するのが基礎的意味論である。さて、上のような具体例のもとで「仕方」を導入すると、もしかしたら次のような誤解を招いてしまうかもしれない。その誤解とは、「仕方」というものを導入する眼目は、

6. 再認能力の定式化については Evans 1982, 279-280 を参照。それに基づく固有名に関する説明は、例えば Evans 1982, §11.2 を参照。再認能力に基づく単称概念の定式化は Peacocke 1992, 110 にある（ただしピーコックの定式化の二行目に現れる「an object X」、および三行目と四行目に現れる「X」はどれも「Lincoln Plaza」に置き換えないと奇妙な主張になる）。

7. Evans 1982, §11.2 参照。より詳細な論点については藤川 2014, Ch. 2 参照。

ただ、記述的意味論の枠内で説明できない同一性言明の持つ認識上の価値を説明するというところにのみ存する、という誤解である。

確かに、エヴァンズやレカナティが強調するように、まさにこの「仕方」の違いは、認識上の価値を説明する。「Daniel」と「Edward」の意味論的値が同じだったとしても、クリスにとっては「I have met Daniel」と記すことと「I have met Edward」と記すこととはいわば別々の指し手である。それは「Daniel」と「Edward」が意味論的値に結びつく仕方が異なるからであり、クリスにとってそれはア・プリオリには同じ働きをする道具ではないからだ。だからこそ、それらを同じ働きをする道具として扱ってよいという知識、つまり「Daniel = Edward」が真であるという知識をクリスが得たならば、そこには情報の取り扱いの仕方に関する一定の保証が得られるがゆえの、認識上の前進がある。今まで一方の名前と結び付けられてきた情報を他方に結び付けられてきた情報と区別していたクリスは、それ以降その両者に関わる情報を相互に参照できるようにするだろう。例えば「I have met Daniel」から「I have met Edward」を推論するようになるだろう。そしてその結果、それまでは許されなかった推論を行えるようになるかもしれない。

しかしこのことは、記述的意味論の枠内で説明できない同一性言明の認識上の価値を説明するというところにのみ存するということの意味しない。確かに、同一性言明が持つ明らかな認識上の価値は、「意味論的値が決定される仕方とは何か」という基礎的意味論に属する問いを、記述的意味論から切り離すきっかけだったかもしれない。しかし、いったんそのような問いが認識されたなら、それは単称名辞に限らず、すべての表現に問題になる。つまり「同一性言明の認識上の価値」という形で論点を直ちに提示できないようなすべての表現に関して、その意味論的値だけでなく、それがその意味論的値を持つ仕方が問題になる⁸。それらは総じて、基礎的意味論の問題である。

経験的言明に現れる確定記述の場合には、確かに少々話がややこしい。標準的な可能世界意味論の枠組みで考えてみよう。エヴァンズが指摘したように、その意味論的値として個体を持つ表現だけを「指示表現 (referring expression)」と呼ぶのであれば、経験的言明に現れる確定記述は基本的には指示表現ではないと考えるのが自然だ⁹。その場合、例えば二項量子に述語を一つ補ったものとして分析すること

8. この点は、フレーゲやフッサールが名辞だけでなくすべての表現に意義ないし意味を認めていたことと合わせて考えれば、解釈上も示唆的かもしれない。

9. 少なくとも、「The winner of Jena might lose at Jena」のような文が真となる読みと偽となる読みの違いを、確定記述のスコープの違いとして捉えるならば、そうだろう。またこの時、フレーゲの「指示」を「意味論的値」として解釈するなら、確定記述の「指示対象」と

になろう。すると、名前の中の同一性言明とは異なり、確定記述の中の同一性言明の真理が持つ認識上の価値は、記述的意味論のレベルで説明できる¹⁰。しかし重要なのは、スタルネイカーが指摘するように、たとえこの場合でもその確定記述（の部分表現）が意味論的値を持つのはいかなる仕方にかという基礎的意味論の問いは手付かずだということである。記述的意味論のレベルである表現の意味論的値として個体を割り当てようが、述語の意味論的値から真理値への関数を割り当てようが、内包を割り当てようが、アスペクト込みの個体を割り当てようが、いかなる仕方でもその表現がその意味論的値を持っているのかという問いは常に問われうる。

そして、もし「意味」という語をその仕方に焦点を当てるために用いるのであれば、ある表現の意味とは何かという問いに対して、その意味論的値を答えるだけで済ますことはできない。問題はある表現が持つ意味論的値が何かではなく、どのような仕方ですべて持っているかだ。その仕方の説明に意味論的値への言及が含まれることは理解できる。しかし意味論的値の記述（を詳細にする）だけで答えることはできない。どのような仕方ですべて東京駅にたどり着いたかという問いに、東京駅と答えることはできない。

もちろん、「意味」を術語として導入する場合に、それを意味論的値とそれを持つ仕方のどちらを指すために用いるかということは、用語法上の選択の問題としてある。また、ある自然言語において「意味」に相当する語が、この二つのどちらを表すために使われているのか、というその言語に関する経験的な問いも、完全に理解可能だ。しかし、「意味」という語を「仕方」を問題にする術語として導入した上で、ある表現をその意味論的値に結びつけるような使用者側の仕組みに全く言及せず済ませることができる場合、そこで問題になっている「意味」だとか「仕方」だとかは一体何を意味しているのだろうか、という疑問はもっともではないだろうか。私の植村氏に対する疑問は、基本的にはこの疑問と同じものである。

呼ばれるものは、フレーゲ自身の選択とは異なり、確定記述の指示ではないということになる。

10. ここでいう「名前」には「記述名 (descriptive name)」も含まれることに注意。記述名とは、その意味論的値は個体であるが、その意味論的値の固定に一定の記述が用いられているような名前である。Evans 1979a, 184 及び Evans 1982, §2.5 参照。クリプキは「ヘスペラス (Hesperus)」や「フォスフォラス (Phosphorus)」、「切り裂きジャック (Jack the Ripper)」などがそのような名前かもしれないと述べていた。Kripke 1972, 20, 79 参照。

第三節 疑問点の提示

さて以上の議論を踏まえて、改めて私の疑問点を述べ直したい。

『論理学研究』においてフッサールが「意味」や「志向的对象」といった概念を用いて議論を進める際に従事している探求として、次の三つの選択肢（およびその組み合わせ）がある。(1) 記述の意味論、(2) 基礎的意味論、(3) それ以外。私にとって自然な解釈に従うと、フッサールが対象性を「無に等しい」と度外視して志向と充実化という枠組みで（作用のスペチエスとしての）「意味」を考察している限りでは(2)に取り組んでおり、その探求の最低限の前提として「志向的对象」について語る場合には(1)に取り組んでいる、ということになる。実際、まさに氏が指摘していたように、作用のスペチエスとしての意味は、表現から対象に至る過程や手続きとして理解されるのがふさわしいのだとすると、これ以外にどのように解釈すれば良いのだろうか。

もちろん基礎的意味論に取り組んでいるからといって、意味が作用のスペチエスに尽きるという主張が出てくるわけではない。作用のスペチエスだけでは意味を尽くすことはできず、作用外在的な一定の事実を引き合いに出さなければならないという外在主義的主張は、実際にもっともらしい。しかしその場合でも、作用のスペチエスが度外視されることにはならない。表現から対象に至る過程や手続きに相当するものが基礎的意味論の主題から度外視される状況は考え難い。

本稿の目的は、私にとって自然なフッサール解釈を正当化することではなく、植村氏を解釈するにあたって生じた疑問点を提起することだ。前節末尾で指摘したことと並行的な論点の問題である。つまり、ある表現が「対象に関係する仕方」としての「意味」の候補として、作用のスペチエスに言及せず志向的对象だけ考えておけばいいという状況はいかなるものなのか。これに見当がつかない限り、「意味」としてスペチエスではなく志向的对象を選ぶこともできたという主張を評価することは私には不可能なままである。もしかしたら、氏はフッサールが「意味」という語のもとでその主題を際立たせ取り組んでいるのは基礎的意味論ではなく記述的意味論だと考えているのかもしれない（確かにその場合、志向的对象を意味と呼ぶべきであるという考えは自然だ）。もしかしたら、私が想定するのは全く異なる枠組みが氏の論述の背景をなしており、その枠組みのもとではここで問題になっている論点を適切に捉えることが可能なのかもしれない。いずれにせよ、本稿が何らかの論点に関する有益な議論のきっかけになれば幸いである¹¹。

11. 本稿で導入されている二つの意味論の区別は、フッサールが自覚的に把握し運用して

参考文献

- Evans, Gareth. 1982. *The Varieties of Reference*, Oxford University Press.
- Kripke, Saul. 1972. *Naming and Necessity*, Harvard University Press.
- Peacocke, Christopher. 1992. *A Study of Concepts*, The MIT Press.
- Stalnaker, Robert. 1997. “Reference and Necessity,” in *A Companion to the Philosophy of Language*, Bob Hale and Crispin Wright (eds.), Blackwell, 1997, 534-554.
- . 2014. *Context*, Oxford University Press.
- Stanley, Jason. 1997. “Names and Rigid Designation,” in *A Companion to the Philosophy of Language*, Bob Hale and Crispin Wright (eds.), Blackwell, 1997, 555-585.
- 藤川直也. 2014. 『名前に何の意味があるのか』, 勁草書房.

いたようなものとして導入されているのではなく、我々がフッサールを解釈するために我々が所有しておくことが有益なものとして導入されている。したがって、その区別をフッサールが引けていたかは別の問題だ。